



第6回何でん語らん会

77期永岡宏昌さん

国際協力「市民がなぜ関わるのか」

5月27日水曜日午後6時30分より、東京東筑会何でん語らん会がシーボニア・メンズクラブで開かれた。今回のテーマは国際協力にNGO(市民)がなぜ関わるのかという内容で今現在アフリカのケニアに滞在してケニアの農村部で人々と一緒に生活レベルの向上に熱意を注いでおられる77期永岡宏昌さんの話を中心に何でん語らん会が進行していききました。今回の国際協力というテーマに合うのではないかと63期渡辺克彦が応援協力しているインドカジュラホでメダカ小学校を運営教育している大学時代の友人高森千賀子さんとそこで体育教師をしているサルマン・カーンさんを特別ゲストとして参加。会も国際的になってきま



参加者の皆さん

した。インド中央部で貧しい親たちの子供たちの教育に力を注いで、学校を開設して8年目の彼女の話をメンバーは熱心に聞き、永岡さんからはケニアの保健衛生、HIV(エイズ)に対しての間違いの勉強会開催など。またエイズに感染する人たちが日本が上位に入ること知らないことだらけの話。妊婦の死亡率の高いケニアの現状等々。2時間の時間が足りないほどでした。国際協力の話はよ

く聞きますがその内容については良く知られていない。資金援助などは多く寄せられるのですが、それを受け入れている国に整備体制の欠如。その資金の使い方が良く分からず声の大きいひとが得をするような組織。そんなこんなことの問題解決にNGOの皆さんが現地において体制作りを手伝い現地の人たちに由る現地の人たちの生活の向上が目指せるように教育勉強会を頻繁に開く必要性。教育は基本的な人権、教育水準と経済成長率は強い正の相関関係、基礎教育水準の向上は農業生産性を向上、初等教育を修了した女性性はHIV感染率が二分の一低く、その子供の死亡率は9%低い、教育はHIV感染予防の「社会的ワクチン」等々。



サルマン カーン 高森千賀子 渡辺



での援助活動の必要性が理解出来たようです。NPOの申請方法も実際に活動している人からのアドバイスは大変貴重なものでした。

特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会(略称 Cand o)はしみんによる国際協力団体(NGO)です。ケニア共和国東



永岡宏昌 77期

永岡宏昌のCand oとは

部州ムインギ県の村で活動しています。設立は1998年1月、ケニアなどで協力活動の経験のある人たちを中心に、前年から準備を進めて、東京で誕生。その年から、派遣した日本人とケニヤ人スタッフ、専門家が協力活動を行っています。1999年11月、特定非営利活動法人(NPO)となりました。活動の主体は住民、その人たちが考える「豊かさ」を、その行動によって、達成していくことを目指します。スタッフは、外部者として協力する立場であることを忘れずに、活動することを心がけています。持続的な活動に、地域の資源(人、モノ、資金、情報)を最大限に活用し、住民の自主的な活動として進め、協力が終了後、住民が続けていけるように考えています。



ムインギ県の生活、ムインギ県は雨量が少なく、農耕と牧畜を兼ねる干ばつの被害を受け、土地はますますやせて行き、多くの人が都市に出ていっています。1997年の調査では、県の貧しい地域では、小学校に入学した児童のうち、卒業できるのは三分の一。教室の数も不足していました。また、子供たちの栄養状態もよくありません。教育協力から始めて現在は、保健・環境と合わせて3つの分野をまとめる形でさまざまな活動を行っています。(Cand oの資料参考)興味関心のある方は東京東筑会事務局までお問い合わせください。インドのメダカ小学校についても同様です。

次回の何でん語らん会は9月2日(水曜日)に開催します。参加希望者は早めに世話人村田貴俊(84期)までお知らせください。テーマはIPO(企業を市場に公開)するための重要ポイントです。(記事作成 63期 渡辺克彦)